

# 歌を詠むことによつて「心がはれる」とはどのようなことか

— 本居宣長の『源氏物語玉の小櫛』を手がかりに —

大久保 紀 子

## はじめに

宣長は、歌を詠むことによつて「あはれ」、つまり心の深いうごきが表現され、それによつて「心がはれる」と述べている。「心がはれる」とは、不可解な心の動きを言語化することによつて客観化したり、あるいは、心のうちだけでは消化しきれない思いを他者に語るることによつて受容することとを言うのであろうが、問題は、その言語化の形式が歌でなければならなかったという点である。なぜ歌でなければならぬのだろうか。なぜ、歌を詠むことによつて、あるいは、なぜ、歌を詠み交わすことによつて「心がはれる」のだろうか。

宣長は歌を詠むことの効用は「心のはるゝ」ことにあるとして次のように述べている。

さて又歌といふ物は、物のあはれにたへぬとき、よみいでてをのづから心をぶるのみにあらず。いたりてあはれの深きときは、みづからよみ出たるばかりにては、猶心ゆかずあきたらねば、人にきか

せてなぐさむ物也。人のこれを聞てあはれと思ふときに、いたく心のはるゝ物也。これ又自然の事也。たとへば今人せちにおもひて、心のうちにこめ忍びがたき事あらむに、其事をひとり言につぶくといひつゞけても、心のはれせぬ物なれば、それを人に語り聞すれば、やゝ心のはるゝもの也。さてそのきく人もげにとおもひて、あはれがれば、いよくこなたの心ははるゝ物也。あるひはめづらかなる事おそろしきことおかしき事なども見聞て心に感ずるときは、必人にもいひきかせまほしくて、心にこめがたし。さていひきかせたりとて、人にも我にも何の益もあらね共、いはではやみがたきは自然の事にして、歌も此心ばへある物なれば、人に聞する所、もつとも歌の本義にして、ケリヤチ仮令の事にあらず。

〔『石上私淑言』二二—二二頁〕

「あはれの深きとき」、つまり、心が深くうごく時には歌をみずから詠むだけでは「心ゆかずあきたら」ない。その歌を人に聞かせ、「人のこれを聞てあはれと思ふときに」はじめて「いたく心のはるゝ物」であると宣長は考え、この「人に聞する所」を「もつとも歌の本義にして、ケリヤチ仮令の事にあらず」と述べている。心をはらすという歌のはたらきを重視し、それは

「あはれ」という心のうごきを歌に詠み、聞く者が「あはれ」をもよおした時、つまり、双方に「あはれ」の共振がおこった時に実現すると考えるのである。

歌の効用は心をはらすことにある。そのためには人の「あはれ」を誘うことが必要なのであるが、それを可能にするのが、歌の「文」である。

たゞの詞は其意をつぶくといひつゞけて、ことほりこまかに聞ゆれ共、猶いふにははれぬ情のあはれは。歌ならではのべがたし。其いふにははれぬあはれ深きところの。歌にのべあらはさるゝは何ゆへぞといふに、詞にあやをなす故也。其あやによりて。かぎりなきあはれもあらはるゝ也。

〔石上私淑言〕二一一—二二三頁

「いふにははれぬ情のあはれは。歌ならではのべがたし」。なぜならば、通常の言葉は「其意をつぶくといひつゞけて、ことほりこまかに聞ゆ」と述べられているように、内容を詳しくこまこまと述べ立てて、ことの筋道や理屈を明らかにするのに対して、歌は「其あやによりて」、「いふにははれぬ」「かぎりなきあはれ」を表現する。歌の特質は、その「文」によって心をくまなく表現し得る点にあり、それが聞く人をあはれとおもわせるのにきわめて有効であると宣長は考えるのである。

では、「文」とは何か。それは、歌という表現形式に特有の序詞や掛詞、縁語といった修辞のことである。

されば歌は人のきゝて感とおもふ所が緊要也。この故に神代の歌とても。おもふ心のありのまゝにはよまず。必ことばに文にして、声おかしくあはれにうたへる物也。妻といはむとては、まず若草のといひ、夜といはむにては、ぬば玉のとうち出るたくひなどみな、詞を文にして調をほどよくとゝのへむためならずや。

〔石上私淑言〕二一一—二二三頁、一一三頁

「若草の」、あるいは「ぬば玉の」というような一見無意味と見える序詞、あるいは掛詞、縁語などが「文」を織りなす。それによって調べが整えられ、聞く人の「あはれ」を誘うのである。

宣長が心をはらすための表現形式を歌に求めたのは、こうした歌独特の修辞によって「あはれ」が表現され、それが聞く者の「あはれ」を誘うと考えられたからであった。

では、歌の詞はどのような特別なたらきをして、どのように「心がはれる」という事態を実現するのだろうか。宣長は、歌の詞の特別なたらきについて、分析的に説明することはしない。宣長にとって、歌の詞の特別なたらきは言語学的な、あるいは文法的な分析によって検証され、説明されるべき事柄ではなく、うごく心から生ずる歌の中におのずとあらわれるものであった。だからこそ、「文」なのである。歌の特別なたらきは知識として理解するものではなく、行住座臥、歌に馴れ親しむことによって、心身をおして会得するものであった。

宣長は、「文」についてそれ以上を語らない。ゆえに、歌によって心がはれるとはどのようなことかという問題について、宣長に即して考察した研究はこれまでなかった。しかし、手がかりはある。宣長の『源氏物語』の注釈である『源氏物語玉の小櫛』を読むと、宣長が歌という表現形式がもつ特有の特別なたらきを鋭敏にとらえていることがわかる。特に贈答歌についての宣長の注釈を、他の注釈と比較しながら注意深く読むことによつて、歌を詠むことによつて「心がはれる」とはどのようなことを知ることができるのである。

本稿でこの問題について考察するのは、それによつて「ものあはれ」論についての理解をより深め、広げることができると考えるからである。歌によつて「心がはれる」とはどのようなことを明らかにすることによつて、従来、画一的になりがちであった「ものあはれ」論のとらえ方

を見直し、「もののあはれ」論の視野を広げることができると見られる。

注(3)であげたこれまでの研究では、「あはれ」は歌によって表現され、「共感」されることによって「あはれ」という画一的な理解が踏襲されてきた。しかし、歌のはたらきによって「心がはれる」とは、「共感」という一言ですまされるような安易な事態をいうのであろうか。宣長によれば、「もののあはれ」を知る人とは人の心が人智をこえて不可思議にうごくものであることを知り、かつ、みずからの立場や状況を心憎いまでにわきまえた人のことであった。そうしたすぐれた感受性と判断力をそなえた人物が、単純に「共感」されることによって満足するとはどうてい考えられない。

歌のはたらきは、同じ心情を共有していることを確認してなぐさめあうことだけではない。むしろ、贈答歌という表現形式の特質は、詠み手と返し手との間に、切り返しや意味のずらし、反論などの構造的な展開をもたらす点にある。歌を詠み交わすとは、感情を同じ平面上で共有するという単純な行為ではなく、歌に特有な修辞のはたらきによって、切り返しや反論による視点の転換や深化、ずらしやぼかしによる問題の相対化などを実現することなのである。そうした構造的な展開、深化があるからこそ「心がはれる」のではないだろうか。

本稿では、『源氏物語』の贈答歌にほどこされた宣長の注釈を手がかりとして、歌を詠み交すことによって実現される「心がはれる」とはどのようなことを明らかにしていく。歌という表現形式に特有な修辞のはたらきによって、視点の転換や、問題の相対化がなされ、それによって心情が深められ、展開されていくうちに、みずからの心がとらえ直されていくことを「心がはれる」という。このように理解し、その経過を明らかにすることによって、「もののあはれ」論における「共感」の意味をより広く、また、深く理解することが可能となる。

歌を詠むことによって「心がはれる」とはどのようなことか

## 一 宣長の『源氏物語』の注釈の特質

最初に、宣長の『源氏物語』の注釈の一般的な特質について述べておく。贈答歌の注釈にもその特質がよくあらわれているからである。宣長の注釈の作業の基礎をなしているのは、言葉に対する非常な感度の高さである。宣長は、『古事記伝』で「意と事コトと言コトとは、みな相称タカヒへる物」と述べているが、それは、彼が言葉を見聞きした瞬間、即座に、それがあらわす事、心を感じてしまう人物であったことを示している。この特別な感覚によって、宣長は『源氏物語』に記されている言葉を登場人物の心と即座させ、状況をまのあたりするように再現することができた<sup>6)</sup>。それが、言葉の表面的な意味にとらわれずにその真意をとらえ、前後の記述を根拠として整合性を通していくことを可能にするのである<sup>7)</sup>。

宣長の『源氏物語』の注釈の基軸となっているのは、もちろん、「もののあはれ」論である。宣長の注釈には、『源氏物語』を「もののあはれ」を知るといふ視点から読み通そうという剛い意志がある<sup>8)</sup>。他の注釈の筆致がやや漫然としているのに対して、宣長の注釈が必然性と剛い一貫性をそなえているのは、その意志ゆえである。

また、「もののあはれ」を知るといふことを基軸とする以上、宣長の注釈は必然的に「あはれ」、つまり、心のうごきを細やかにとらえ、柔軟に理解していくという方向性をもつ。宣長は、他の注釈のように、言葉からその人物の思想や性向を付度するのではなく、言葉の源となつていく心のうごきを注視して心の陰影、起伏をすくい出していくのである。

こうした読み方によって、宣長は、他の注釈者達が陥りがちな誤り、たとえば、文脈や言葉の中に明示されている手がかりを読み取れないために、固定観念や常套手段に依存して見当違いの議論をしたり、あるいは、

逆に言葉の表面的な意味にとらわれすぎて真意を取り逃してしまう弊をまぬがれているのである。

## 二 歌を詠むことによって「心ははれる」過程

『源氏物語』の贈答歌の注釈では、以上に述べてきた宣長の注釈の特質がいつそう際立って発揮される。歌という表現形式では、表面上と水面下の二重の意味をもつ言葉によって心境の複雑さが表現されるが、さらに、贈答歌では、双方の複雑な心情が相互作用を経て展開され、とらえ直されていく。宣長は剛直にして柔軟な読み方によって、歌を詠む双方の心のありさまを、また、歌の応酬から生まれる展開を、趣意を一貫させつつ、手に取るように読み取っていく。その注釈を他の注釈と比較しながら検討することによって、歌を詠むことによって「心ははれる」とはどのようなことかを知ることができる。

ここでは、宣長の注釈を手がかりとして、歌の詠み手と返し手が、「文」によって提供される共通の基盤の上に立ちながら、それぞれ異なる心情を表現し、その応酬の中で、視点の転換や切り返し、相対化などの構造的な展開が実現されていくさまを見ていく。歌を詠み交わすことによって「心ははれる」とは、こうした過程の中で、双方の心情が深められ、とらえ直されていくことをいうのである。

### 1 贈答歌が内包するうごきと展開

歌によって「心ははれる」という過程には、二つの要因がはたらいている。一つには、詠み手と返し手が、歌の詞のはたらきによって特定の情景を想起し、その情景をとまにながめてでもいるかのように共有するという

ことである。二つめは、双方がその情景が意味する主題を反芻しながら、それぞれの異なる視点から異なる心情を情景に託して詠みあげるということである。贈答歌では、一つの情景を共有しつつ、そこにそれぞれの異なる視点、異なる心情が詠みこまれる。共有された情景の中に詠みこまれる相異なる視点、心情という構造が、転換や相対化といううごきをもたらすのである。それによって、主題はより奥行き深く、こまやかにとらえられ、また、双方の心情は共通の主題の中に位置づけられながら、それぞれの差異が明らかにされることによって深められ、自覚的にとらえなおされていく。

贈答歌という形式の意味は、単なる心情の表現とその相互作用ではなく、こうした構造的な展開を可能にするところにあり、歌を詠むことによって「心ははれる」とは、この構造的なはたらきによって心情が自覚的にとらえなおされた状態をいうのである。

#### (1) うごきと展開を実現する要因

歌の詞、例えば序詞は、その一言で特定の情景を思い起こさせる強いはたらきをもつ。贈答歌では、詠み手と返し手が、そのはたらきによって想起された情景をとまに眺めているかのように共有し、そこに異なる視点からそれぞれの心情を詠み込んでいく。ひとつの情景を共有しながら異なった思いを託すのである。共有された情景に異なる視点、異なる心情が託されるということが贈答歌の構造を重層化し、交わされる心情にうごきと展開をもたらす。「もののあはれ」を知る人のこまやかな心の陰影は、こうした複雑な構造と作用をもつ歌という形式によってこそ十全に表現され得るのである。

例えば、以下の例では、源氏と紫の上が無常の情景をとまに思い描きながら、それぞれの視点からそれぞれの心情を歌に託している。源氏が藤壺

に対する恋慕の情を抑えきれず、それをしずめようとして雲林院に籠った折り、留守を守る紫の上との間で交わした贈答歌である。『源氏物語』の本文は次のとおりである。

行き離れぬべしやと試みはべる道なれど、つれづれも慰めがたう、心細さまざりてなむ。聞きさしたることありて、やすらひはべるほどを、いかに。など、陸奥国紙にうちとけ書きたまへるさへぞめでたき。「浅茅生の露のやどりに君をおきて四方の嵐ぞ静心なき」などこまやかなるに、女君もうち泣きたまひぬ。御返り、白き色紙に、「風吹けばまづぞみだるる色かはる浅茅が露にかかるささがに」とのみあり。(中略)常に書きかはしたまへば、わが御手にいとよく似て、いますしなまめかしう女しきところ書き添へたまへり。

(『源氏物語』二一一―二一八頁)

「浅茅」、「露」という詞に誘われて、二人の心に無常の情景が思い描かれる。秋の嵐、風に吹きつけられてこぼれる白露、今にも吹きはらわれそうにゆれるくもの糸。二人の間に常無きこの世の映像をともにながめているような共通の基盤が成立する。

ここで、「浅茅」、「露」という詞によって無常という共通の基盤が形成されていなければ、二人の詠歌は、それぞれの心情にまかせてそれぞれに歌を詠み、言語化することによって心をはらすという個別の行為でしかない。また、たとえ無常という共通の基盤があつたとしても、二人がそれぞれ異なつた視点から異なる心情を託すのでなければ、類型的な無常の情景を詠み上げて無常感を確認しあう平板な「共感」が成立するだけで、展開はない。

それに対して、贈答歌とは、主題を共有しながら、その主題をそれぞれ異なる視点からながめ、異なる心情に即して展開させていくことを可能にする表現形式である。共通の基盤の上で、異なる視点から異なる心情を表

歌を詠むことよって「心がはれる」とはどのようなことか

現する。あるいは、異なる視点、心情でありながら基盤を共有している。そうした複雑な構造が贈答歌の特質であり、それが、心情の深化ととらえ直しを実現する。

源氏の歌を受け取った紫の上は、無常という主題にそつてみずからの心情を詠みあげていく。源氏が用いている同じ言葉を内容をずらしながら用い、同じ無常という情景をながめる視点を一転させることによって、源氏に無常の意味を問い直させるように展開していくのである。それと同時に、紫の上自身の心もとらえ直されていく。こうして、「心がはれる」ということが実現される。

## (2) 具体的な経過

以上の経過を、宣長の注釈を手がかりとしながら、具体的に説明していく。宣長は源氏の「浅茅生の露のやどりに君をおきて四方の嵐ぞ静心なき」という歌を次のように注釈している。

初二句に、よものあらしを合せて、上に、所からいとゞ世ノ中のつねなさをおぼし明して、とある心もて見へし。

(『源氏物語玉の小櫛』四―四〇七頁)

宣長の注釈の特質は、この歌を詠んだ源氏の心情を、広く前後の文章を見渡すことよつて具体的にとらえていることである。無常という共通の主題の中で、源氏が見据えているのはどのような無常か、その視点をとらえよと宣長はいう。

宣長のすすめにしたがつて、数段落前の「所からいとゞ世ノ中のつねなさをおぼし明して」という記述に注目すれば、そうでなくても僧坊といふところから無常を感じずにはいられない場所で、秋の月をながめ明かしてもの思ふ源氏の姿が浮かび上がってくる。そのひとしお身にしみる無常感がこの歌に託されていることに留意せよと宣長はいうのである。源氏が無

常の情景に投影したひとしおの無常感とは、詞書に表現されているとおり、藤壺に対する恋情を断ち切るべく「行き離れぬべしやと試み」ても、いかにしても「慰めがた」い「心細さ」であった。その「心細さ」を自分の帰りを一人待つ紫の上に重ねて、「風の風に散り、吹き消されていく露のようなはかないあなたの姿を思うと心配でたまらない」と源氏は詠む。

それに対して、紫の上は次のように返す。「風吹けばまづぞみだるる色かはる浅茅が露にかかるささがに」。宣長の注釈は次のとおりである。

色かはるは、源氏の君の心のかはれるよし也、下に色かはると有しも云々といへるにてしるべし、注、こゝもかしこもたがへり、さゝがに、は、さゝがにの糸也、しからざれば、みだるゝといふに縁なし

〔源氏物語玉の小櫛〕四—四〇七頁

この歌の注釈の論点は、「色かはる」がどのようなことを意味しているのかということである。他の注釈では、「色かはる」の意味を「よろづ故院の御時のやうにもなく、源（源氏—大久保注）の威勢もなき」こととする。無常ということからたやすく連想される盛者必衰のイメージによる解釈である。この解釈は、無常という主題に即してはいるが、一般的すぎて、二人の複雑な心情に対してあまりにも無頓着である。宣長が周到にも指摘した源氏の無常感の具体的な内容に目が行き届いていないばかりか、二人の詞の「文」を駆使した丁々発止のやりとりがとらえられていない。そのため、紫の上の返歌が、同じ主題の中で同じ詞を用いながら、独自の視点に立つことによって源氏の視点を転換し、心情を切り返す、いわば果敢な試みであることがわからなくなってしまうのである。

宣長は、「色かはる」について、「下に色かはると有しも云々といへるにて知るべし」と述べている。帰邸後の源氏と紫の上の会話の場面と照応させてみれば、「色かはる」とは源氏の心が紫の上から離れることを意味す

ることがわかるはずだというのである。すでに、源氏は雲林院で紫の上の返歌を読んだとき、その筆跡に「いますこしなまめかしう女しきところ」があると感じていた。「もののあはれ」を知る人の典型である源氏は、自分の心がわりを案ずる紫の上の心を察知していたのである。帰邸した源氏を、紫の上は何事もなかったかのようにとりつくるって、おだやかに迎える。しかし、源氏は、そうした紫の上の様子に、かえって、源氏の心が離れていくことへの不安と悲しみを見て取り、雲林院で直感した、紫の上の不安をあらためて実感するのである。以上のことを根拠として、宣長は「色かはる」とは源氏の心がわりを意味すると判断する。

宣長の解釈によって、紫の上の返歌は切り返しの意味を持ち、それを受け取った源氏ももちろんその意味を理解しているというスリリングな状況が確にとらえられる。表面上は無常を意味する言葉のやりとりすぎないが、水面下では二人の関係のはかなさをめぐる緊張した展開がくりひろげられている。

他の注釈の中では、注の(10)であげたようにすでに『源氏物語新釈』が宣長とほぼ同じ解釈を示していた。また、『萬水一露』と『弄花抄』は源氏の心がわりを案じる紫の上の心情に言及しているが、紫の上の返歌の切り返しの意図が明確にされていないために、二人の贈答は無常ということの平板なやりとりとなってしまう。宣長のように、切り返すという紫の上の独自の視点を明確にしてこそ、贈答歌のもつ重層的な構造が明らかにになり、二人の応酬がうごきを帯びて展開し始めるのである。

源氏から歌を受け取った紫の上は、源氏の心の深さに涙するが、それは、源氏の心がいつまでつづくかという心もとなさ、それが絶えたあとのつらさ、寂しさを思う涙でもあった。源氏の心の深さを感じれば感じるほど、無常を知る紫の上の悲しみは深まるのである。

紫の上の複雑な心情を表現することができるのは歌以外にはないであろう

う。無常という情景の中でとらえられる自分と源氏との関係、二人の心情の重なりとずれ、そうした複雑な構造をそのせつなさに見合った凝縮した形で表現できるのは、歌だけである。歌はその「文」のはたらきによって視点や立場を反転させ、切り返し、相対化して、共有されている情景の奥行きを深め、濃淡をさらに細やか描きあげて返すというわざをなしとげる。「もののははれ」を知る人の、一般的な言葉では表わしきれない心の陰影は、そうしたわざによってはじめて表現し得るのである。

紫の上は自分を浅茅の露にかかつて今にも風に吹きはらわれそうな蜘蛛の糸に見立てる。自分は浅茅の露のようにはかなく移ろいやすい心の持ち主であるあなたをたよりにしているためにこそ、心乱れるのだと。

紫の上は、常ならずうつりかわるのは、ほかでもないあなたの好き心なのだと見事に切り返している。同じ「浅茅」、「露」という詞を用い、源氏の「嵐」、「静心なき」に対応させて「風」、「みだるる」という類語を用いながら、紫の上の歌は、秋の嵐に無常を見ていた源氏こそが無常感の起因なのだのとべて、視点の転換を迫るのである。こうして、同じ無常の情景でありながら、視点は一転し、二人の関係が内包する無常がにわかにはズームアップされる。同じ情景における、同じ詞を用いての転換であるからこそその転換はより劇的な効果を生む。こうしたうごきが贈答歌という形式の妙味である。

このように歌を返すことは、紫の上自身の心情をとらえ直すことでもあった。紫の上は源氏の歌によって、自分の姿をあらためてはかないものとしてとらえ、そのはかなさのゆえを詞の「文」をおして本人である源氏に示すことによって乱れる心をしずめ、落ち着き先を見出そうとしているのである。

源氏もまた、紫の上の切り返しの歌を読んで、みずからをとらえ直さざるを得なかった。帰邸後、源氏は紫の上の落ち着いた態度に女らしさが

歌を詠むことによって「心のははれる」とはどのようなことか

まし加わっていることを感じ取るが、それは、ともすれば乱れがちな心を健気にもおさえているゆえであった。源氏はそれを察知し、みずからの抑制のない恋情が紫の上の心に深く影を落としていることを実感する<sup>⑩</sup>。しかし、ここで留意しなければならないのは、それによって源氏は、反省したり、行動を改めたりするわけではないということである。「もののははれ」を最もよく知る人である源氏は、みずからの心のうごきに、また、紫の上の心に、限りなく「あはれ」を感じ、それが紫の上に対する常にもましたいくしみとなつてあらわれるのである。

最後に宣長が「さゝがには、さゝがにの糸也(後略)」と述べていることを見逃してはなるまい。「さゝがに」は蜘蛛の糸ではなく、蜘蛛そのものにとつてもいいわけであるが、蜘蛛ととると、風に吹かれて今にもこわれそうなのはかなさが伝わってこない。このように蜘蛛の糸でなければならぬと注記していることから、宣長が、先に述べた特別な言語感覚によって、秋風に吹きはらわれそうな蜘蛛の糸をまぶたに思い浮かべ、無常の情景を源氏、紫の上とともに共有しながら注釈していることを知ることができる。

## 2 うごきと展開の型

贈答歌が表現するうごきと展開にはさまざまな型がある。右に述べた紫の上の返歌は切り返しの例であるが、言葉の意味をずらして相手の心情を相対化する例、歌の詞によって共有された情景の中で現実を離れてたわむれ遊ぶ例をあげる。

### (1) 相対化の例

夕霧の子、蔵人の少将から直情的な手紙を受け取った玉蔓の娘大君が、

そのおおげさな表現を歌によつていなし、少将の思いつめた心情を相対化して返す場面から引用する。手紙に対する歌の応答だが、内容上、贈答として扱って問題はない。『源氏物語』の本文は次のとおりである。

（藏人の少将の手紙―大久保注）今は限りと思ひはつる命のさすがに悲しきを。あはれと思ふ、とばかりだに一言のたまはせば、それにかげとどめられて、しばしもながらへやせん

（『源氏物語』五一八九頁）

（大君の返歌）「あはれてふ常ならぬ世のひと言もいかなる人にかくるものぞは」ゆゆしき方にてなん、ほのかに思い知りたる

（『源氏物語』五一九〇頁）

大君に恋い焦がれる藏人の少将は、彼女が冷泉院に参院した後もあきらめきれずに、「もう死ぬと決まったこの身ではあるが、せめて「あはれ」と思つていと仰つてくだされば、生きながらえるかもしれない」と切々と訴える。大君は、少将の「あはれと思ふ」、「今は限りと」をそれぞれ「あはれ」、「常ならぬ」で受けながら、いずれもその意味を大きくずらして答えて、少将の思いつめた心情を相対化してみせる。

少将の「あはれと思ふ」とは愛しているということであるが、大君はそれを愛する人を亡くして悲しいという意味にすり替え、「今は限りと」という大げさな忌まわしい言葉については、「常ならぬ」でうけて、肉親の死をめぐる文脈に引き込み、自分に対する恋情など思いもよらない風をよそおつてはぐらかすのである。宣長の注釈は、そのずらしを明確におさえて、以下のように注釈している。

あはれといふ一言も、いかなるひとにかくる物かは、しらねども、今かぎりときく、ゆゝしき方にて、心にはほのかに、あはれと思ひしりたり、それも恋の方にはあらず、たゞゆゝしき方にてぞ、しりたるといふ也、かたにてなんといへる詞に、心をつくべし、

又、ほのかにといへるも心しらひ有、注どもは、おろそかにて、こまかなる意あらはれず、（後略）

（『源氏物語玉の小櫛』四一四七四頁）

大君は「あはれ」を恋情からの心のうごきではなく、愛するものをなぐした時の悲しい心のうごきととる。そうすると、少将の両親は健在だから、誰に対して「あはれ」と思うのか、「いかなるひとにかくる物かは、しらねども」、つまりさっぱりわからないとほけてみせる。自分は父を亡くしているので、肉親を喪うという「ゆゝしき方」につきては、「ほのか」に思い知られる。しかし、あくまでも恋心の「あはれ」ではなく「ゆゝしき方」においてである。宣長は「かたにてなん」という一言を注視して大君の真意を読み取り、この歌が少将の未練がましい恋情を相対化しつきはなす歌であることを明示している。

宣長は、また、「ほのかに」という小さな言葉を見逃さない。肉親の喪失という「あはれ」さえ「ほのか」にしか知らない私には、あなたのいう「あはれ」は全くもって想像さえつかないと大君はいう。その「ほのか」は、藏人の少将の「今を限りと」を繰り返す大げさなものの言いに対して、「ものあはれ」を知る人ならではの繊細な奥ゆかしさを示す言葉である。それはまた、大君の、自分の心情と藏人の少将の心情が内容においてばかりでなく、程度においても大きく隔たつていることを伝えようとする「心しらへ」であることを宣長は読み取っている。この大君の相対化の試みもむなしく、少将は、あげ足をとるように、さらに大げさな歌を返してくる。少将は「ものあはれ」を知らない人の典型なのである。

宣長の眼光紙背に徹すような読み方に対して、例えば『湖月抄』では「今は限りとありしをいへり」、「世のつねなきをおもひしる」と述べているが、ここでは、「今は限り」という詞から「世のつねなきをおもひしる」という単純な連想の筋道がたどられるだけで、同じ詞をやりとりしながら



大君が少将の思いをはぐらかし、相対化しているという構造が理解されていない。つまり、切り返しや相対化などのうごき、展開を実現する歌特有のはたらきがとらえられていないのである。逆をいえば、宣長の注釈は、歌という表現形式のみがもつはたらきを敏感にとらえた注釈であるということがわかる。

## (2) たわむれ遊ぶ例

恋心や死別の悲嘆は最も大きな心のうごきを引き起こすという点において「あはれ」の典型ではあるが、それが「あはれ」のすべてではない。なごやかな、楽しい交わりの場での心のうごきもまた、「あはれ」である。そうした場においても、歌の詞によつて共通の情景が思い描かれ、そこにそれぞれの視点、心情が詠み込まれて「心がはれる」という状態が実現される。ここでは、気心の知れたもの同士が、歌によつて共有された虚構の情景の中でその登場人物になりきつて歌を詠み交わす例をあげ、そこに何ともいえない楽しさ、おかしみが生み出されるさまを見ていく。そうした楽しさ、おかしみによつて双方の心が充足するとすれば、それもまた、歌によつて「心がはれる」ということの一つの形なのである。例としてあげるのは、薫物を競う遊びに続いて酒宴を楽しんだ明け方、源氏が弟である蛸の宮に自身の直衣を贈つた時の贈答歌である。

宣長は、この贈答歌がうちとけた間柄でのたわむれであることを強調する。二人は、歌の詞によつて作り上げられた虚構の情景の中で、情景にふさわしい役回りをそれぞれが演じて楽しんでいるのである。他の注釈は、歌に詠まれている内容と現実との照合に腐心して、宮の北の方がいたか否かについて言及したり、あるいは宮は夜離れのない人であったと述べたり、あるいは、歌の詞の典拠を詮索することに執着している。いずれも現実を離れた世界をつくりあげることが歌という表現形式の最も重要なた

らきの一つであることを理解していないために、見当違いの議論を展開しているのである。

それに対して宣長は、この贈答歌はたわむれのやりとりであり、そのユーモアをこそ読み取るべきであると考えている。実証に長けた宣長であればこの時宮に北の方がいたか否かなどを典拠を示しながら子細に述べそうなところであるが、そうはしない。実際は、この時宮に北の方はいないのであるが、それは、この贈答歌の意義とは全く関知しないことがらである。この贈答歌の意味は、歌の詞によつて作りあげられたたわむれの世界で、現実の自分を忘れ、現実にはあり得ない会話を楽しむという点にある。その楽しい心のうごきもまた「あはれ」であり、そうして楽しむことによつて「心がはれる」のである。

『源氏物語』の本文は次のとおりである。

（源氏は帰る宮に直衣一装束と薫物二壺を贈つた―大久保注）宮、「花の香をえならぬ袖にうつしもて事あやまりと妹やとがめむ」とあれば、「いと屈じたりや」と笑ひたまふ。御車繫くるほどに追ひて、「めづらしと古里人も待ちぞみむ花のにしきを着てかへる君」またなきことと思さるらむとあれば、いといたうからがりたまふ。

（『源氏物語』三―四一二頁）

注釈の論点の一つは、源氏の歌にある「花のにしき」という言葉をもどくように解釈するかという点である。もともと奢侈を好む源氏が自分の贈り物のことを自賛して「花のにしき」と述べたという解釈は論外としても、この巻の主題である紅梅、あるいは直前の段にてくる薫物の紅梅に関連づけて「花のにしき」というと解釈するのが主流である。

しかし、宣長は「花のにしき」が源氏のたわむれの言葉であることを次のように明確に指摘する。

花のにしきとは、宮の歌に、えならぬ袖とあるをうけて、こなたより

歌を詠むことによつて「心がはれる」とはどのようなことか

も、ことさらにたはぶれて、かくのたまへるなり、もしたはぶれてに  
あらずは、我が方より贈り賜ふ物を、花の錦とは、いかでかよみ給は  
ん、注誤也

『源氏物語玉の小櫛』四―四四六頁

宣長は、「花のにしき」という言葉を、源氏が「ことさらにたはぶれて」  
述べているのだと注釈する。一般的なたわむれではなく、大げさな、いわ  
ば芝居がかった台詞であることを読み取っているのである。他の注釈が  
「花」という言葉にとらわれて実際の状況と辻褃を合わせようとするのに  
対して、宣長は、「紅梅」にかけた言葉であることはもちろんだが、それ  
以上に、たわむれの言葉であることを強調する。「花のにしき」が、蛭の  
宮の「えならぬ袖」を受けて、それを倍にして返した言葉であることを鋭  
敏な言語感覚によって直感的にとらえているばかりでなく、そこに「こと  
さらにたはぶれ」る芝居がかったニュアンスがあることを鋭くかぎつけて  
いるのである。蛭の宮と源氏は、「花の香り」、「袖」という詞によって描き  
出された情景を共有し、その情景にふさわしい役回りをそれぞれ演じて楽  
しんでいるのである。

「花の香を」という宮の歌は、頂戴した直衣のすばらしさを詠むことに  
よってその贈り主である源氏を賞賛するという趣旨の歌であるが、ただ賞  
賛するのではない。宮は茶目つ気たつぷりに、「こんなにすきな香りが  
たきしめられた装束で帰ったら妻に嫉妬されてしまう」とびくびくする気  
弱な夫という役回りを演じておもしろがっているのである。

それを受けて、源氏は「いと屈じたりや」、つまり「ずいぶん弱気なん  
だね」とまげ返す。そして、花の香りがたきしめられた装束にまつわる情  
景に巧みに入り込んで、ふさわしい役どころを演ずるのである。源氏が選  
んだのは、朝帰りした恐妻家の夫を「まあ、めずらしいことですよ」と  
鷹揚にゆるして迎える家人の役回りであった。

源氏の歌に添えられた「またなきこと」という言葉も解釈がわかる言  
葉であるが、宣長は次のように注釈している。

かやうのめづらしき花の錦をきてかへり給ふは、又なきこととおぼさ  
るらんにて、これも花の錦と同じたはぶれ也、注ども、いみしきひが  
こと也、

（『源氏物語玉の小櫛』四―四四六頁）

宣長は、「またなきこと」という言葉もまた「花の錦と同じたはぶれ」  
であるという。「花の錦と同じたはぶれ」であるということは、つまり、  
自分が賜った装束を「花のにしき」と自賛したことを再び繰り返して強調  
すべく、家人の「またなきこと」という言葉を借りて、二つとないすばら  
しい装束であると重ねて自賛しているということである。

宣長が、他の注釈を「いみしきひがこと」と批判するのは、みな必然性  
のない穿鑿にすぎないからである。それに対して、宣長が「たはぶれ」で  
あることを強調するには必然的な理由がある。宣長は、この贈答歌を一  
貫して源氏が賜った装束のすばらしさを、ひいては源氏のすばらしさを述  
べたものと見る。宣長は、源氏は「ものあはれ」を知る最上の人物であ  
るという見方を堅持し、一貫して源氏を非難せず、賞賛する立場をとるが、  
ここでも、それを貫くわけである。しかし、源氏自身が自分が蛭の宮に  
賜った装束を褒めることは、現実ではゆるされない。ゆえに、虚構の世界  
で演技することが必要なのであった。蛭の宮の歌は、源氏から贈られた装  
束があまりにもすばらしいゆえに妻の嫉妬を案じる恐妻家の歌である。ま  
た、源氏は珍しく朝帰りの主人をむかえる家人を演じて、こんなにすば  
らしい装束をきて帰るとはまたとないことであると述べて装束を賞賛して  
いる。視点、ないしは主体は異なるといえども、いずれも、一貫して、源  
氏の賜った装束を、ひいては、源氏を賞賛しているのだと宣長は解釈する。  
現実の世界ではゆるされない、歌によって作り出された虚構の世界でこそ

のたわむれなのである。

宮と源氏は、花の香りがたきしめられたすばらしい装束にまつわる情景を共有し、その情景の中で、宮は気弱な夫を、源氏はめずらしくすばらしい装束で朝帰りした夫を迎える家人を演じて歌を詠み交わす。そうしたたわむれを歌は可能にし、二人は現実を離れた虚構の世界を楽しみ尽くして、心をはらすのである。

さらに、この贈答歌には、おかしみのただよう落ちがつく。家人になりきった源氏の大げさな言葉が思わぬ展開を生むのである。そのことに気づかせてくれるのが、最後の「いといたうからがり給ふ」という言葉についての宣長の注釈である。

宣長は、この贈答歌の趣旨を源氏がたまわった装束のすばらしさを賞賛することであると見え、その読みを一貫させてきたが、「いといたうからがり給ふ」の解釈でもその姿勢をくずさない。宣長は次のように注釈している。<sup>21</sup>

源氏の返しは、卑下したる歌なるべきに、かへりてたはぶれて、花の錦など、ことごとくしくのたまへる故に、こなたより、えならぬ袖など  
とよみ給へるは、たゞよのつねの賞美になりて、けおさるゝを、からがり給ふ也、

（『源氏物語玉の小櫛』四―四四六頁）

この贈答歌の趣旨を源氏の賜った装束のすばらしさを賞賛することであると見え、それぞれの歌にそれぞれの役回りからの賞賛をみてとった宣長は、最後に、適切にも、宮の「えならぬ袖」と源氏の「花のにしき」を対比して、両者の賞賛の度合いの高さの比較に及んでいる。本来ならば、宮の賞賛の歌に対して、源氏は自分の贈り物を卑下して返すべきであるが、たわむれて、「えならぬ袖」よりもさらに大げさに「花の錦」と返す。そして、宣長にいわせれば、そこで宮は「しまった」とばかりに気づいた

歌を詠むことによって「心がはれる」とはどのようなことか

ということなる。宮は、源氏に「花のにしき」と返されたことによって、自分の「えならぬ袖」という表現が一般的すぎて、十分な賞賛になつていなかったことに気づいた。だから、宮は「からがり給ふ」のたと宣長は解釈する。

おもしろいのは、このように解釈することによって、歌のたわむれの世界から、舞台がぐるりとまわるように一転して、現実の世界にひきもどされている点である。たわむれの世界で演技していたつもりは、源氏の「花のにしき」の一言で夢からさめたように現実の世界にひきもどされて、「からが」っている。

## おわりに

贈答歌では、詠み手と返し手が歌の詞によって想起された情景を共有しながら、異なる視点から、それぞれの心情を表現する。「心がはれる」とは、その応酬のうちに生まれるうごきと展開の中で、それぞれの心情がとらえ直されることであった。

宣長が注視した「あはれ」という心のうごき、その心のうごきが歌の詞に乗せられたところに生まれる動的な展開を、先行する思想家達が前提としていた動いてやまない力の観念の残滓と見ることもできるだろう。宣長にとつて世界は死物であり、人は、人格的要素を持つ神によってあやつられる人形であった。そうした即物的な世界の中で、唯一うごくものとしてとらえられているのが、「あはれ」という心のうごきである。悲しみにつけ、喜びにつけ、うごく心。その人知れずうごく心は、歌という表現形式によって自覚され、歌の詞によって触発されて深められ、展開していく。かつて、先行する思想家達が世界に見てとつた動いてやまない力は、宣長において、寸心のうちに見いだされ、歌という箱庭の中でひそやかに表現

されるのである。

### 引用文献

巻数、頁は、例えば第四巻の二五頁から引用した場合、四―二五頁と記した。  
\*『本居宣長全集』(筑摩書房、一九六八年―一九九三年)。引用の際表記を改めた部分がある。

\*阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注、訳『新編日本古典文学全集 源氏物語』第一巻―第六巻(小学館、一九九四年―一九九八年)。

\*『源氏物語』の注釈書

宣長が参照した注釈書は『湖月抄』、『首書源氏物語』、『源注拾遺』、『箒木抄』、『雨夜物語だみ詞』であると考えられている(注③の高橋俊和の著書の二〇一頁―二〇二頁、及び杉田昌彦『宣長の源氏学』(新典社、二〇一一年)、一九七頁)。本稿の論旨上重要なのは、宣長がどの注釈書を読んでいたかではなく、宣長の注釈の独自性を示すことであるゆえ、以下の注釈書全般を参考にした上で、必要に応じて引用した。

・『花鳥余情』(『花』と略記。以下同) 伊井春樹編『松永本花鳥余情』(桜楓社、一九七八年)

・『弄花抄』(『弄』)、伊井春樹編『弄花抄 付源氏物語聞書』(桜楓社、一九八三年)

・『細流抄』(『細』)、伊井春樹編『内閣文庫本 細流抄』(桜楓社、一九八三年)

・『孟津抄』(『孟』)、野村精一編『孟津抄』(桜楓社、一九八〇年)

・『岷江入楚』(『岷』)、中田武司編『岷江入楚』一一五(桜楓社、一九八〇年―一九八四年)

・『萬水一露』(『萬』)、伊井春樹編『萬水一露』一一五(桜楓社、一九八八年―一九九二年)

・『湖月抄』(『湖』)、有川武彦校訂『源氏物語湖月抄(上)(中)(下)増注』(講談社、一九八二年)

・『源注拾遺』、『契沖全集』第九巻(岩波書店、一九七四年)

・『源氏物語新釈』(『新』)、『賀茂真淵全集』第十三巻―第十四巻(続群書類従

完成会、一九七九年)

### 注

(1) 「せんかたなく物のあはれなる事ふかきときは、さてやみなんとすれども。心のうちにこめては。やみがたくしのびがたし。これを物のあはれにたへぬとはいふ也。さてさやうに堪えがたきときは。をのづから其のおもひあまる事を。言のはにいひいづる物也。かくのごとくあはれにたへずして。をのづからほころび出ることばは。必長く延て文あるもの也。これがやがて歌也。(中略)さてかく詞にあやをなし。声をながく引ていひ出れば。あはれくとおもひむすば、れたる情のはるゝ物也。」(『石上私淑言』二―一〇九頁)。宣長は「情のはるゝ」と「心のはるゝ」(同一二二頁)を厳密に区別しないで用いている。本稿では統一して「心」を用い、「心のはるゝ」を「心がはれる」と表記して論じていく。

(2) 『あしわけをぶね』二―三三頁、『石上私淑言』二―一七七頁。

(3) 宣長の歌論については、日本思想史の分野では、「もののはれ」論の内容と意味を主に歌の発生という面から考察した研究(例えば、菅野覚明『本居宣長言葉と雅び』(べりかん社、一九九二年)の三三、詞論)の2、3)や、歌がもつ共同性に注目する研究(山下久夫『本居宣長と「自然」』(沖積舎、一九八八年)の第一章のII)などがあるが、歌のはたらきについて具体的に考察した研究は見当たらない。文学研究の分野では、高橋俊和『本居宣長の歌学』(和泉書院、一九九六年)が宣長の和歌論の内容と歌論史上における位置づけを詳細に明らかにしている。

(4) 本稿では歌のはたらきが典型的にあらわれる贈答歌に限定して論を進めていく。たとえば、独詠の場合でも、歌を詠むことは、みずからの心情を歌という形式を保持してきた長い文化的いとなみの中に位置づけることであり、それは、すなわち、同じ歌の詞を用いて心情を表現してきた古来の詠み手達と心情を交換することにほかならないからである。したがって、歌を詠むことよって「心がはれる」という事態は、それが独詠であっても、贈答歌であっても、基本的にかわりはないと考えられる。

- (5) 『古事記伝』 九一六頁。
- (6) 例えば、源氏と紀伊守との会話についての注釈（『源氏物語玉の小櫛』 四一三六頁）。
- (7) 例えば「命婦」という一言から作者の真意を読み取る（『源氏物語玉の小櫛』 四一三九二頁）。
- (8) 例えば、空蟬の「みなほし」についての注釈（『源氏物語玉の小櫛』 四一三六七頁）。
- (9) 『湖』(上)、五三〇頁の頭注。称名院西三條公條（『細』の著者）の説である。
- (10) 「下」とは『源氏物語』二二二頁の部分を指す。すでに『新』が宣長とほぼ同じ解釈を示しており（十三三三四頁）、『萬』は、著者能登永閑自身の説をあげ、「色かはる」を「世中のさまかはりゆく」とことと解釈して切り返しの意図を読み取ってはいないものの、「下」の部分と照応させて、紫の上が源氏の心がわりを案じていることに言及している（『萬』 一四七〇頁）。『弄』もその点を指摘している（六一頁）。
- (11) 紫の上は「行き離れぬべしやと試みはべる道なれど、つれづれも慰めがたう。」という言葉に、源氏の移り気な心を敏感に読みとったはずである。事実源氏は、このお籠りに先だつて朧月夜と逢瀬をかわし、また、藤壺と禁断の契りを結んでいるばかりか、紫の上との贈答のあとに、朝顔の君に思いをのべる歌を贈っている。
- (12) 『源氏物語』二二二頁。
- (13) 『源氏物語』五九一頁。
- (14) 『湖』(下)二八〇頁。前者は『細』からの引用、後者は北村季吟の師、箕作如菴の説である。
- (15) 以上、『孟』二五三頁―二五四頁、『細』二五二頁―二五四頁、『岷』三二六七頁、『萬』三二〇二頁。
- (16) 『細』二五二頁―二五三頁。
- (17) 『弄』一五二頁、『細』二五二頁、『岷』三一二六七頁、『湖』(中)、六二九頁（頭注）。
- (18) これに近い注釈としては『細』の「よのつねの人ならばかくいひ給ましきを此宮と源とは一段とへたてなき中なればかくの給と也」（二五二頁）がある。
- (19) 「家人をまたなき人とほめていゝ」（『細』二五三頁）、「妻の嫉妬を恐れているので朝帰りはまたとない珍しいこと」（『孟』二五四頁、『弄』一五二頁、『萬』三二〇二頁）、「妻にとがめられること以外にむつかしいことはないのか」（『萬』三二〇二頁）、「宮をまたなき人とする」（『萬』三二〇二頁）。
- (20) 先にあげた空蟬の「みなほし」という言葉の解釈、また、夕顔の「ころあてに」の歌の「夕顔の花」についての解釈（『源氏物語玉の小櫛』四一三七四頁）参照。前者は源氏を決して非難しない例、後者は源氏のすばらしさを際立たせる読み方の例である。
- (21) この部分は注を記していない注釈書が多い。『花』は「からかるはたへかたき心なり」（二七頁）、『萬』は『花』を引用（三二〇二頁）。

歌を詠むことによつて「心がはれる」とはどのようなことか